

港北区災害ボランティア連絡会ニュース

事務局 〒222-0032 横浜市港北区大豆戸 13-1 吉田ビル 206 港北区社会福祉協議会

第 8 号

TEL 045-547-2324 FAX045-531-9561 E-mail hokuhoku@kouhoku-shakyo.jp

2013 年 5 月

* 入会は随時受け付けています。あなたの町の防災度を高めるためにお力を貸してください。

新年度に思うこと

会長 井上禮子

25年度が4月から始まりました。年度の始めに毎年思うことですが、会員が増えて、いろいろの会合に出席していただき、会が活発になるといいな！と思います。今年はこれが少しですがかないような感じがしております。東北の地震現場に行かれてボランティアとして活動してこられた方です。頭で考えてきた方と、行動で示したい方々とのギャップは大変な違いがありますが、そこをなんとか乗り越えて、考え・行動・伝えるを目標にして1年間やっていこうと思っております。区役所、社協、皆様方のご協力やご理解を得ながらの会ですが、よろしく願いいたします。

総会案内

日時：2013年5月15日（水）10時～12時

会場：港北区福祉保健活動拠点3階

* 年度当初の大切な会です。みなさんの意見を元に今年度の活動が決まります。いざというとき助けて貰える、助け合える、そんな安心感をもって住めるような港北にするため、今年はこんなことをやります、こんなことをしたいです、との声を出し合いましょう。お互いの活動がお互いを助けるような、自分たちの活動の支えになるような今年度方針を決めましょう。

そんな今年が目玉はなにか

1 区との協定締結

* 市の防災計画の改訂を受けていよいよ災害ボランティア連絡会の真価が問われます。

2 広報活動が充実するかも

* ホームページやメーリングリストで活発な意見交換をしよう。

* 多くの会員がホームページやメーリングリストを使いこなせるような講座が欲しい

3 中身も変わる！？

* 楽しい防災ってあるらしいけど、それならいいね

* 毎月出ていて得する感じがある会が良いな

* 我が家の防災度もアップしそう

それらを実現させるのは会員のみなさんです。総会へお越し下さい。

第1回定例会報告

日時：平成25年4月17日（水）AM10:00～

場所：港北区福祉保健活動拠点多目的研修室

出席者 :

井上会長（港北区ボラ連）、白井副会長（個人）、萩生田（港北区役所総務課）、富士塚ボランティアグループ、港北区地域子育て支援拠点どろっぷ、国際救急法研究所、港北手話サークル梅の会、国際交流ラウンジ、仲手原マザークラブ、港北区ボラ連、個人8名、事務局（区社協）

司会＝白井副会長。合計 20名

【1】平成25年度事業計画

- ◎平成25年度定例会は毎月第3水曜日に原則として実施する。
- ◎港北区役所総務課危機管理担当は新年度より3人体制になった。
- ◎4月1日より区の防災計画を見直しており、近隣区の防災計画の良い所は取り入れて行きたい。
- ◎配布した平成25年度事業日程案に未決定で白紙個所が有るが、順次打ち合わせ白紙部分の事業を検討し埋めて行く。
- ◎港北区災ボラは隣接区の災ボラと交流を図る必要がある。
- ◎港北区災ボラ連絡会活動目的として下記提案あり。
 - ①災害時の災害ボランティアセンター運営能力を高め、いざという時に備える。
 - ② 災害に強い町を目指し、地域防災力の向上に努める。
 - ③ 以上をとして多くの地域防災人の育成に努める。
 - ④ 以上の目的達成のために組織の強化を図る。
- ◎地域防災拠点の訓練日が確定した時点で区より災ボラに情報を流して欲しい。
- ◎個人が所有している災ボラに関する情報を活用するために、災害ボランティア連絡会は組織を強化し、情報を活かす機能を備える必要である。
- ◎災害時の備えは普段より行政・組織・地域他の連携し、災ボラセンター立上げ準備を心掛けるべきである。災ボラセンターをスムーズに立ち上げるには、地域の方々と交流を進めることが必要である。

【2】総会について

- ◎総会で可決が必要な平成24年度事業報告、25年度事業計画案の書類が提出された。

【3】平成25年度登録・変更について

- ◎ 上記項目について付岡さんより説明のあとに定例会出席者が登録料を支払い、本年度の会員登録手続をおこなった。

鶴見区役所、社協、災ボラ

三者協同のシミュレーション訓練に参加して

1995年1月の「阪神淡路大震災」から18年、多くの課題と教訓から、今年も各地で災害ボランティア活動の訓練は続けられている。早朝の鶴見区役所玄関ホールには、既に約70人の関係者が午前7時からの災害ボランティアセンター開設の準備をしていた。八幡準総務部長(副区長)ほか7人の区職員が参加する区災害対策本部との提携や、鶴見大学からも担当者が参加するなど、地域の災害対策の積極的な取組みがうかがえる。訓練途中で駆けつけた災害ボランティアや地域住民15人も加わり、総勢100人近くに増える。依頼内容は地域防災拠点からの要請が多く、40件のニーズを想定していた。スタッフたちは、その場をスムーズに行動する。しかし、初めて参加した地域住民は手順やニーズ設定に戸惑いがあるようだ。

時間が限られた訓練では、全体の流れと効率を重視せざるを得ない。救援活動の省略と設定は実践性を欠くが、実際の地震発生時では多くの混雑を招くという厳しい認識がある。各機能の検証は講座や勉強会で補うと聞く。訓練を終えると 8時30分、区役所内を警戒音が鳴り響き、地震発生(訓練)の緊急アナウンスが流れた。

あらためて行政と協働する訓練の積み重ねが、災害時の連携となり、心強い地域のつながりになることを思い知らせてくれた。(古川卓二)

参加団体紹介

NPO法人びーのびーの (港北区地域子育て支援拠点どろっぷ)

現在の子育ては、古くからあった地域社会の互助機能も失われ密室育児になりがちです。特に、0～3歳児の育児は、子どもの成長の土台づくりの大切な時期である一方、日本では母親に子育ての負担が集中し、様々な問題を引き起こす原因の一つともなっています。しかし、在宅で子育てをしている親子が気軽に利用できる子育てのための施設は、以前は充分整備されておらず、密室育児にならないよう、共に学び育ち合う場を提供するために、親子で参加する新しい考え方の居場所を創りたいと考え、2000年2月に菊名駅の西口商店街空き店舗を利用して「親子の広場」を開設しました。2006年3月には港北区から委託を受け、大倉山駅に「港北区地域子育て支援拠点どろっぷ」を開設、現在に至っております。

転出入の多い港北区では、地縁・血縁を持たない子育て家庭も多く、特に子どもの年齢が小さいと「地域」につながるきっかけもなく、難しいのが現状です。乳幼児子育て家庭は「災害弱者」ともいわれますが、ふだんから「地域」を意識して、「顔の見える関係」でつながっていくことも必要です。「地域」と「乳幼児子育て家庭」をつなげていくために私達には何ができるのか・・・災害ボランティアネットワーク連絡会の参加メンバーを始め区内外のいろいろなネットワークと交流を広げ、活力ある地域社会を作り出していけるようにしたいと思っております。

NPO法人びーのびーの <http://www.bi-no.org/top.html>

港北区地域子育て支援拠点どろっぷ <http://www.kohoku-drop.com/>

新年度新企画 1 災ボラのロゴ、キャラクター募集

ホームページ開設に伴い、そこに載せる港北区災害ボランティア連絡会のロゴマークやキャラクターが欲しいね、との声が上がりました。そこでみなさんからアイデア募集です。

また無料で出来るソフトもパソコンで探せます。総会にみなさんで考え合うのも楽しいですね。

新企画 2 会員名刺作ります

今まで町内会や他団体と挨拶するとき名刺が無いと渡せなかったり、個人の名刺を渡したりして不便でした。そこで会員名刺を作ります。ご希望の方は広報の山本さんまでお申し出ください。無料でお作りします。

港北区災害ボランティア連絡会

山本正史

事務局 〒223-0032 港北区大豆戸 13-1 吉田ビル
港北区社会福祉協議会
TEL 045-531-9561 FAX 045-531-9561
EMAIL hokuhoku@kouhoku-shakyo.jp

横浜に大災害が発生したとき、ボランティアセンターを立ち上げて
全国からかけつけたたくさんのボランティアさんを
助けを必要とする被災者の方のもとに的確に派遣します

新企画3 ITに強くなろう

ホームページやメーリングリストは動き出すのが少し遅くなりますが、既に「掲示板」がパソコン上で出来上がっています。 <http://kohoku-sv.bbs.fc2.com> を開いてパスワードを入れれば掲示板にどんな情報が載っているか読めたり、書き込んだりできます。パスワードは会員だけが知ることが出来ます。総会や定例会でお知らせします。

読んで得する災害本

「人が死なない防災」 片田敏孝著 集英社新書

著者は群馬大学の教授で2004年から釜石市の危機管理アドバイザーとして児童、生徒を中心とした津波防災教育に取り組んできた。東日本大震災で大津波に襲われた岩手県釜石市だが小中学生の生存率は99.8パーセントであった。

子供たちはいかにして津波から命を守ることができたのか。それは著者の提唱する避難の三原則の実践であった。

三原則その1「想定にとらわれるな」

三原則その2「最善をつくせ」

三原則その3「率先避難者たれ」

行政の避難指示を待つだけでなく、主体的な避難行動こそが、命を守るために必要なのである。いつ災害に襲われるかしれない私たちすべてにとって「生き残るための指針」を提起する必読書である。(山本)

「想像ラジオ」 いとうせいこう著 河出書房新社

死者はどのようにしたら亡くなったという事実を受け入れるのでしょうか。そして残された人はその事実をどのようにして納得していけるのでしょうか。思いを持つ人だけにDJの声が届くラジオを聞いて、それぞれが事実を受け入れ、別れを告げる。

「生き残った人の思い出もまた、死者がいなければ成立しない」

「亡くなっている君は生きている僕からの呼びかけをもとに存在して、僕を通して考える」

311を越えて、大事な人を喪失する痛みと、悲しみと、辛さと、そして受け入れることから来る安堵の大きさを静かに教えてください。傑作の評判高い本です。(宇田川)

編集後記

☆久しぶりに年賀状に返事がないので心配していた石巻の方ですが、気になっていたがまだ手紙を書く元気が出ないとおっしゃっていました。忘れていないとのメッセージを積極的にお伝えすることが必要と痛感しました。(宇)

☆立ち入り禁止が解除された福島県富岡町には2年前の惨状がそのまま残っていました。いつになったらこの町に人が戻ってくるのでしょうか。(山本)

☆初めて福島の仮設住宅に何う機会がありましたが、「30年経ったら帰れるかな」とおっしゃった初老の方の言葉が今も重く耳に残っています。もっと何かできることがあるはず、知らなくちゃいけないことがあるはず・・・ですよね・・・(山口)

☆6月1日～16日石巻かほく復興写真展が横浜で行われます(会場：日本丸メモリアルパーク、月曜休館)お時間ある方は是非足を運んで被災地の現状を見てみてください。(野)